

アペックスグループ
Environmental Report

2012

環境報告書



社名 株式会社アベックス
 本社 〒474-0053
 愛知県大府市柁山町2-418
 設立 昭和38年(1963年)2月
 資本金 8,400万円
 売上高 640億円※
 (平成23年度実績)
 従業員数 1,850人※
 営業拠点 全国主要都市103ヶ所※
 (平成24年3月末)

※株式会社アベックス西日本を含みます。

経営理念

常に改善・改革を繰り返し、知恵を出し
 進化し続ける集団となる
 人と企業の成長を通して、最高の商品を
 お客様に提供する
 自らの責任として環境保全活動に取り組み、
 地球環境との調和を図る

MEMO

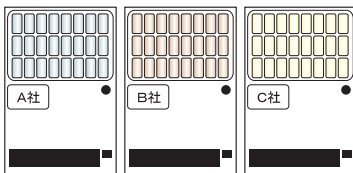
アベックスは専門オペレーターです。

“自動販売機オペレーター”とは、自動販売機を保有してさまざまな場所に設置することによって、中身商品やサービスを販売・提供する業態のこと。オペレーターには、これらの業務を専門的に行う「専門オペレーター」と、飲料メーカーなどがオペレートも兼ねて行う「兼業オペレーター」があり、アベックスは「専門オペレーター」にあたります。

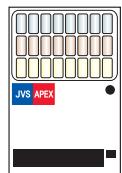
アベックスは専門オペレーターのため、品揃えが特定メーカーに偏ることがありません。このため、売れ筋商品を1台に取り揃えたり、カップ機を併設することもできるアベックスでは、複数の自動販売機を集約することができ、消費電力量とともに、総合的なCO₂排出量の削減を目指します。もちろん、効率的なスペースづくりにも貢献します。

■缶・ペットボトル自動販売機の場合

A社 飲料自動販売機 B社 飲料自動販売機 C社 飲料自動販売機



アベックスの飲料自動販売機



自動販売機オペレーター業

全国に拠点をもち、独立系専門オペレーターとして、カップ式自動販売機を約5万7,800台、缶・ペットボトル・紙パック飲料自動販売機を約2万2,500台、その他自動販売機を約1,850台展開しています。

従業員様用としてオフィスや工場で、施設のご利用者様用として駅・高速道路SA・PA等で、生徒様や学生様用として学校で、さまざまな方々の憩いにお役立ていただいています。



フード事業

お客様に“本物の美味しさ”をお届けするブランド「エム・ワン カフェ」のお店として、2008年にデリカテッセンをオープン。本場アメリカンスタイルのハンバーガー・サンドイッチのお店です。コーヒー系は、弊社が新しく企画・開発した専用コーヒーマシンを使ってお飲み物を提供しています。

また、肉にこだわった“メニューのない店”「スペシャリタ・ディ・カルネ・キッチャーノ」を、2011年3月にオープンさせました。ビステッカをはじめイタリアン・スタイルの肉料理に特化した、他にはない個性的なダイニングです。



フレンチレストラン「アピシウス」は、1983年4月に有楽町・蚕糸会館にて創業、本年で29年目を迎えました。

古代ローマ時代の令名高き食通Marks Gavius Apisiusを店名の由来とするにふさわしく、“真実の正統派フランス料理”をご提供するため、そして、お客様に無二の感動を贈るために、その味を磨き続けています。





編集にあたって

東日本大震災で被災された皆さまに
心からお見舞い申し上げます。

アベックスでは、ステークホルダーの皆様との対話を大切に
考え、2001年から「環境報告書」を発行し、事業活動に
伴う環境負荷の状況と負荷低減の取り組みについて、情報を
開示してまいりました。

弊社の環境保全への取り組み・社会とのかかわりを、本報
告書を通して、一人でも多くのステークホルダーの皆様にご
一読いただき、ご意見を頂戴し、今後の取り組みに活かして
まいりたいと考えています。是非、忌憚のないご意見、ご感
想をお寄せくださいますようお願いいたします。

※「環境省 環境報告書ガイドライン（2007年度版）」を参考
にしています。

※アベックスでは、本報告書印刷時の環境配慮として、「(コー
トなし) 100%再生紙」「植物油インキ」「水なし印刷」の適
用を行っています。これにより、CO₂排出量の削減や、印刷
時の有害廃液の排出量削減、また、リサイクル時の廃棄物
削減などに貢献しています。



報告対象範囲

株式会社アベックス

※グループ会社・株式会社アベックス西日本、日本ベンダー
整備株式会社、株式会社名古屋フーズの取り組みも一部含
みます。

※ただし、株式会社アベックスの「熱海ナーセリー」(植物[蘭]の
栽培)、「エム-ワン カフェ デリカテッセン」(珈琲とサンドイッチの飲食
及び販売)、「キッチンアノ」(イタリア料理店)における取り組みは含
みません。



報告対象期間

実績 2011年度(2011年4月1日~2012年3月31日)

※一部、直近のデータを含みます。



発行日

2012年7月



次回発行日

2013年7月発行予定



本報告書に関するご連絡先

株式会社アベックス 環境部

〒102-0074

東京都千代田区九段南2-3-14 靖国九段南ビル6F

TEL. 03-3234-6428 FAX. 03-3239-5805

レポート内容は弊社ホームページでもご覧いただけます。

<http://www.apex-co.co.jp>

Contents

目次

会社概要	1
経営理念	1
ごあいさつ	3
環境方針	4

特集

アベックスのミッション	5
カップ式自動販売機だからこそ、できること	7
①自動販売機と中身商品の開発と環境負荷	
②ライフラインとしての清涼飲料自動販売機	

環境への取り組み

事業活動における環境影響	11
環境保全活動の柱	12
持続可能な社会を目指して	13
環境マネジメント活動	19

社会とのかかわり

地域社会のために	21
環境保全活動の歩み	22

チャレンジ
25

アベックスグループは
チャレンジ25キャンペーンに参加しています。

ごあいさつ



株式会社アペックス
代表取締役社長

吉平 孝

困難を乗り越え、お客様に安定して安全で安心なお飲み物を提供できる企業であり続けることをお約束します。

昨年は、日本という国の歴史にも人々の心にも深く刻まれることとなった国難 東日本大震災が、発生以前のあらゆる概念を覆しました。とりわけ、自然災害に対する備えの甘さ、そして人災ともいべき東京電力福島第一原発での安全神話の崩壊は、これからの日本のエネルギー政策の修正を余儀なくさせました。このことは、短期的に見れば、産業界にとっても大きな痛手ではありますが、脱原発依存へと大きく動き出す契機となりました。

私どもアペックスグループにとっては、昨年、コカ・コーラウエスト社との提携業務を本格的に始めた矢先の震災であり、リーマンショックをようやく乗り越え、未来を語ることへの希望を持ち始めたという時のことでした。そして、震災ストレスとともに、提携業務をアペックス流のオペレートへと軌道にのせていく難しさもあり、業績がじわじわと悪化していく中、電力の逼迫が追い打ちをかけました。

しかし、自分たちが着手したものは、事業として軌道にのせていかねばならないという思いに揺るぎはありません。正に、新しいものを始めるにあたっての生みの苦しみであると捉え、また、想定した実りの収穫のためにも、昨年末に多くの経営的な見直しに着手しましたので、今年はそれをどれだけスピーディーに具現化できるかを問う年の幕開けとなりま

した。昨年、立ちほだかった困難は、放置すれば困難なままですが、私たちは課題に変え、チャンスに変えてまいります。困難な状況は時に自分を見失いがちです。私たちが見失ってはならないもの、それは、「アペックスならではのオペレートサービス」だと改めて足元を見つめた次第です。私たちオペレーターにとって、オペレートサービスをきちんとすること…この「当たり前のことを当たり前にした」結果が、「アペックスに任せて成果が出た」という評価につながるのだと、いま一度原点回帰を果たす所存です。一方、原点回帰は、己の強みを知ることであります。私たちのオペレーション、品質、商品、機械、そして環境経営が、お客様に満足のいく一杯をお届けできるのだと自信をもっております。

昨年のダーバン合意において、日本はポスト京都議定書に賛成はするも参加はしないという道を選択しました。自ら掲げた「温室効果ガス25%削減」という目標も、暗澹たる行く末に、わずか2年で見直しを検討する声も出ています。まずは、経済の立て直しをせねばならないという考えは、産業界においては当然のものです。しかしながら、もう一步踏み込んで考えねばならないとも思います。食品業界に身をおく私たちとしては、名ばかりの“生物多様性基本法”や“カルタヘナ法”も気がかりです。

● ● 環境方針 ● ●

(2011年3月1日改訂)

【基本理念】

アベックスグループは、地球環境の保全が世界共通の課題であることを認識し、経営の最重要課題の一つに「地球環境との調和」を掲げ、自らの責任として、環境保全活動に最善を尽くします。

【基本方針】

アベックスグループは、自動販売機オペレーター業界の一員として、持続可能な低炭素社会を築くために豊かな自然との共存を目指します。

1. 事業活動、製品及びサービスが環境に与える側面を的確に捉え、環境マネジメントシステムを継続的に改善し、汚染の予防に努めます。
2. 環境側面に関係して適用可能な法的要求事項及びその他の受入れを決めた要求事項を順守するとともに、国、自治体等の施策に積極的に協力します。
3. 循環型社会の実現と省資源に向けて、事業活動のあらゆる側面で原材料・エネルギーなどの4R(リデュース、リユース、リサイクル、リカバー)を、適正且つ積極的に推進します。
4. 業務の改善に取り組み、総合的な環境保全活動に努めます。
5. 周辺地域の環境美化等に積極的に取り組み、地域社会に貢献します。
6. 環境方針は一般に開示します。

厳しい寒さの冬を経験すると誤解しがちですが、地球温暖化はもう待ったなしの状況まで来ています。台風、大雨、高潮、酷暑・・・等、自然災害は年々大きさを増し、食料問題、健康問題、そして経済問題、それぞれが振幅し合い、どれも切り離しては考えられない状況になっています。70億もの人で共有しているたった1つの地球で起きていることは、それらすべてが現実に他ならないのです。経済問題と対峙することが現実に立ち向かうことであるのと同様、環境問題を直視することも現実に立ち向かうことなのです。環境問題は、余裕のある一部の人間の趣味や道楽で立ち向かうものではありません。先送りすることは、しっぺ返しを大きくするだけのことです。取り組むその手を止めたら、もう向上などあり得ないのです。私たち企業人は、自分たちにできることを着実にやっていくこと、取り組みを止めないことが必要であると考えます。

私たちは、環境問題への取り組みを本業とは別物として扱うことはしていません。カイゼンに取り組むことが環境経営の根底であるという考えに則り、すべてにおいてムダ・ムラ・ムリがないかを洗い出し、可能な限りの効率化を図ってまいります。国内の人口減や省エネという観点から、運営する飲料自動販売機についても、同様に考えます。かつて業界全体

が「台数」を追い求めていましたが、私たちは、ご利用の少ない自動販売機については、エネルギー消費効率を高めるために効率よい設置場所への移設や統合による台数減という提案もあえて行ってまいり所存です。もちろん、オペレートの効率を高め、総合的な環境負荷低減に努めるという方針は従来通りに推進してまいります。

また、全国的に防災意識が高まる中、東日本大震災後、弊社のカップ式自動販売機が復興支援に貢献できたという実績と経験、そして教訓を活かした「災害対応型カップ式自販機」の積極的な提案も行ってまいり所存です。

今般、『環境報告書2012』に、昨年度1年間の取り組みをまとめました。この報告書を一人でも多くのステークホルダーの方々にご覧いただき、私たちの考え方や取り組みをご理解いただくこと、そして、私たちの取り組みに対するご意見、ご評価を頂戴し、今後の活動に活かしていくことが、アベックスグループの今後の社会・環境保全活動のたゆみない歩みへとつながっていくと考えています。

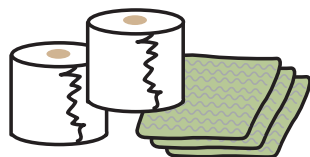
2012年7月吉日



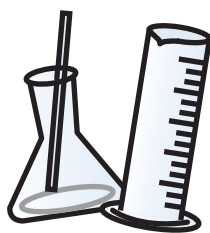
環境への配慮

— 持続可能な低炭素社会のために —

- 夏場のピークシフト・ピークカット
- 環境配慮型自動販売機の開発
(省エネ化・軽量化・部品点数の削減等)
- 空き容器リサイクル
(紙カップの MATERIAL リサイクル・サーマルリサイクル)
- レギュラーコーヒー残渣リサイクル (肥料化・炭化)
- 自動販売機のオーバーホール
- 自動販売機廃棄時のリサイクル



環境負荷低減



- 使用する水の状況に応じて最適な水フィルターを使い分け
- 中空糸膜フィルターの使用
- 残留塩素の完全除去
- [ルートセールス][QCクルー][サービス品質部][品質管理センター]の4部門による品質管理
- 自動販売機調整技能士の育成を支援

品質管理

安全・安心のための取り組み

非常時における対応・取り組み — 帰宅困難者や避難生活の支援として —

災害時対応

- 中身商品の提供
- 紙カップの提供
- 水・お湯の提供

※ライフラインが使用可能な状態においては
温かいお飲み物や冷たいお飲み物の提供等、
“いまできる” 支援をご提案してまいります。



販売商品・バラエティ



- お客様の嗜好・ニーズに合わせた商品提供
- “選べる” 商品メニュー
- 徹底した鮮度管理にこだわる
レギュラーコーヒー豆等の原料を使用
- 地産地消にこだわる原材料を使用

お客様のご要望にお応えするために

カップ式自動販売機だからこそ、できることを。

自動販売機と中身商品の開発と環境負荷

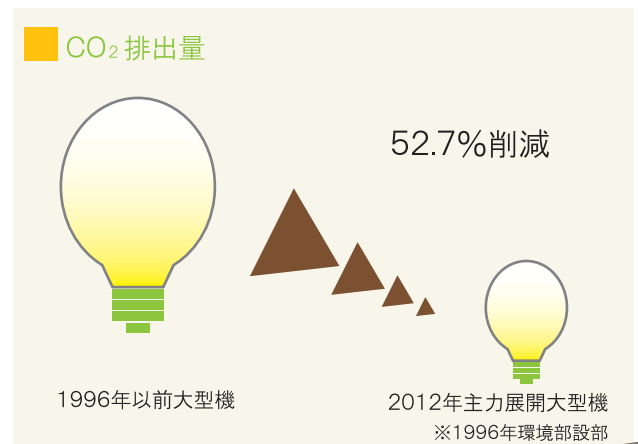
さらなるエコベンダーを目指して

省エネルギーとCO₂排出量の削減

自動販売機オペレーターの中で唯一自社内に開発部をもち、独自の自動販売機開発を続けるアペックスは、お客様にとって使い易くて安心してご利用いただけることはもちろん、製造から廃棄・リサイクルに至る全ライフサイクルにおける環境負荷低減に努めています。

新機種開発においては、積極的な真空断熱材の使用で、断熱による保温効果を最大限に活かして熱量を保つ等、2012年度の省エネ法に基づくトップランナー基準の目標値を達成しています。また、「スリープモード」機能も省エネ対策として新しく開発したものの1つ。カップ式自動販売機は、食品衛生上、完全に全ての電源を断つことが難しいのですが、今後の需要を見据え、ご利用のない休日に、ほぼ完全停止に近い環境を作り出すことに成功した機能です。

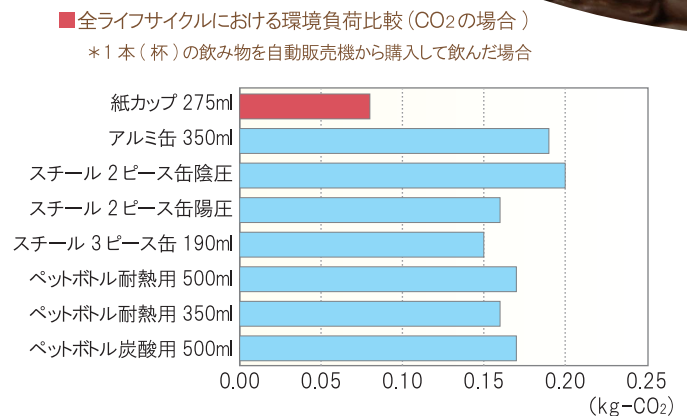
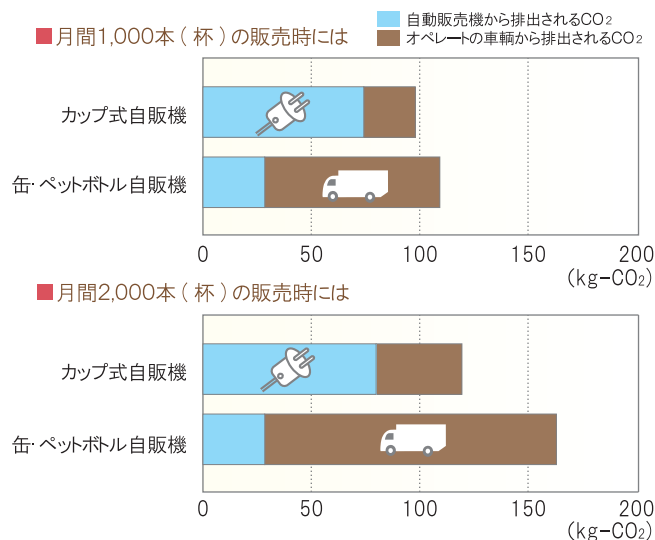
さらに、グリーン購入法に基づく「環境物品等の調達」の推進に関する基本方針」に示される『判断の基準』に適合した機種の開発に取り組んでいます。



省資源と軽量化

アペックスでは、輸送・廃棄時を考慮し、徹底した合理化を図ることによって、自動販売機の軽量化にも努めています。軽量化を図ることによって、省資源に貢献しており、CO₂削減とともに、今後も開発段階から積極的に取り組んでまいります。

資料 ～ 環境負荷は目先のことだけではなく、広い視野で考えねば意味がありません ～



※「平成16年度容器包装ライフ・サイクル・アセスメントに係る調査事業 報告書（財団法人 政策科学研究所）」と当社実績に基づきます。
※今回、容器原料採掘～容器製造～自動販売機での販売～空き容器回収～リサイクルまでの範囲を、各容器の評価の対象としました。

「1杯のコーヒー」から考える生物多様性

サスティナブルコーヒーの展開

コーヒーは、熱帯雨林をはじめとする生物多様性の宝庫で育つ農作物です。従って、商品を選ぶ時、「サスティナブルコーヒー」であるかを検討することがコーヒー農園の保全になり、コーヒー農園が包括する生物多様性の保全につながるとアペックスは考えます。

消費国のわたしたちがおいしさを楽しむのであればよいというのではなく、現在のことだけでなく未来のことも考えた上で、生物や自然環境、生産者の人々の生活を良い状況に保つことを目指して生産・流通されるコーヒーの総称を「サスティナブルコーヒー」といいますが、アペックスでは、これから先もずっとおいしいコーヒー

をお届けするために、そんな誰もが日常的にできる環境保全活動を推進しています。

現在、展開中のサスティナブルコーヒーは「有機栽培生豆100%使用コロンビア」と「ブラジルブレンド」です。

最高の一杯、最高のひとときを。アペックスのコーヒーへのこだわり

コーヒーの味や香りを左右するのは、言うまでもなく、原料であるコーヒー豆と焙煎方法です。

よりおいしい一杯のコーヒーを目指し、アペックスでは、自動販売機の開発とともに中身商品の開発も飲料原料メーカーと共同で行います。

レギュラーコーヒー豆は、自社のオリジナル自動販売機から一杯ずつ最適な味と香りでコーヒーを抽出できるよう、最良の豆を選定します。ブレンドやロースト度合など、細かい仕様をメーカーにオーダーし、その後、何度も試飲をくり返し、指定通りにできているか、ロット毎にチェックします。そして、アペックス基準を満たしたもののだけが、自動販売機で販売され、お客様のお手元に届くのです。

●「有機栽培生豆100%使用コロンビア」

アペックスでは、「有機栽培生豆100%使用コロンビア」を2001年春より販売しています。

●有機JASマークの付された有機農産物とは ●●●●●●●●●●

自然の力を最大限に利用した農業である有機農業によって生産された農産物のことで、次の要件を満たすことが必要です。

- 堆肥等で土作りを行い、種まきまたは植え付けの前2年以上（多年生作物※にあっては、最初の収穫前3年以上）、原則として化学肥料および農薬を使用していない田畑で栽培する。
- 栽培中も、原則として化学肥料および農薬は使用しない。
- 遺伝子組換え技術を使用しない。

※果樹、茶木、アスパラガスなど。コーヒーやカカオも多年生作物。

「有機栽培生豆100%使用コロンビア」の麻袋（点線内に有機JASマーク）
※写真提供：株式会社ユニカフェ



●「ブラジルブレンド」



2010年秋より、レインフォレスト・アライアンス認証のダテラ農園で生産されたコーヒー豆を30%使用した「ブラジルブレンド」を販売しています。

●●レインフォレスト・アライアンスとは ●●●●●●●●●●

米国ニューヨークに本部を置く団体で、地球環境保全のために熱帯雨林を維持することを目的に設立された国際的な非営利環境保護団体。

サスティナブル・アグリカルチャー・ネットワーク (SAN) によって定められた、100項目に及ぶ社会的、環境的、経済的基準に基づき、農園の認証を行っており、生物多様性及び労働者と地域共同体の権利と社会的境遇を守るために活動しています。レインフォレスト・アライアンスの基準を満たす農園や森林には、アメリカ、ヨーロッパ、アジアなどの企業や消費者に広く認知されつつある認証マークを使用する資格が与えられます。



◀ダテラ農園

カップ式自動販売機だからこそ、できることを。

ライフラインとしての清涼飲料自動販売機

カップ式自動販売機と地元の水道水 ～「水」も“地産地消”の時代へ～

日本の多くの地方自治体が世界に誇る技術を持ち、安全で安心、しかもおいしい水道水を提供しているが、飲用に利用されているのはごくわずか。

一方、近年、各地で「蛇口回帰キャンペーン」が繰り広げられたり、環境に意識の高い人々の間では飲用としての水道水に関心が高まっています。

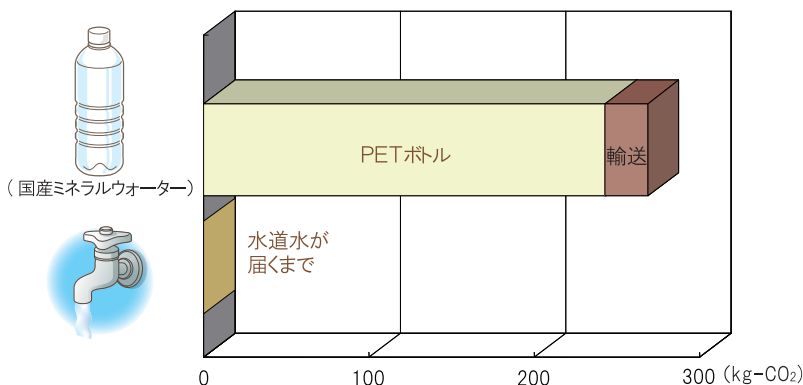
では、なぜ、いま、「水道水」なのでしょう。その理由の1つに、飲料水の輸送に伴うCO₂排出量が挙げられます。輸入されたものより国産品が、また、国産品でも購入する土地に近いところで製造されたものが、輸送に伴うCO₂排出量は少なく、さらに水道水となると言うまでもありません。そして、もう1つの理由は、ライフサイクルにおいて排出されるCO₂量の比較です。水道水が各家庭に届くまでには、取水場、浄水場、配水場、それぞれで電力が使用され、その使用によりCO₂が排出されます。一方、PETボトル入りミネラル

ウォーターは、容器製造と輸送、リサイクルという各過程でCO₂が排出されます。ライフサイクルで両者を比較した場合、水道水のCO₂排出量は、PETボトル入りミネラルウォーターの約1000分の1以下ともいわれており、環境負荷の低さが顕著に出ます。

このように、飲料水の供給方法として、他の代替手段よりも環境負荷の面ですぐれているうえ、おいしい水道水。カップ式自動販売機は、そんな地元の水道水を利用して、さらに、「水」にこだわるアペックスは、高レベルフィルターを自動販売機内に取り付け、水道水をもっとおいしく安全にしたうえで、お飲み物を1杯ずつ機内で調理しています。日常生活に欠かせないものだからこそ、環境負荷のできるだけ低い飲み物を選んでいただきたい。飲用水も“地産地消”の時代だとアペックスは考えます。

資料 ～ ライフサイクルにおけるCO₂排出量比較 ～

※「1m³の水（500ml入りPETボトル2,000本相当）」のライフサイクル



※PETボトル（耐熱用500ml入り）のインベントリは「平成16年度容器包装ライフ・サイクル・アセスメントに係る調査事業報告書（財団法人政策科学研究所）」に基づき、山梨でミネラルウォーターを充填したものを、名古屋まで輸送する場合を想定して算出しています。

※「水道水が届くまでに排出されるCO₂」は、名古屋市上下水道局HPを参照しています。

▼北九州市で開催された「日本水道協会 第80回総会」。開催時に、「地産地消」の水道水を活用したカップ式自動販売機と、災害時に活躍する災害対応型カップ式自販機を実機を使ってデモンストレーションしました。北九州市水道局マスコットの「スイッピー」も、スイッピーをデザインしたオリジナル紙カップを持ってアピールに一役買っていただきました。



カップ式自動販売機で災害支援

東日本大震災後間もない3年半ばから8月中旬まで、アベックスでは被災地の避難所において「復興支援自販機」を設置し、温かいお飲み物（コーヒー・ココア・お茶・コーンスープ）を無料で提供させていただきました。まだ雪の降る寒さの中、「心身ともにあたたまることのできる飲み物」の提供は被災者の方々に非常に喜んでいただき、また、衛生問題が深刻化する中、自己完結型の紙カップは非常に重宝がられました。

道路が寸断され、メーカーの工場も被災し、スーパーやコンビニエンスストアに物資が届かない、そんな状況下、カップ式飲料自動販売機は、「ライフライン」という位置付けのもと、多くの被災者の方々に微力ではありますが支援させていただきました。その様子をすべてご理解いただいていた宮城県多賀城市様が、カップ式自動販売機の存在

価値を非常に高くご評価していただき、8月下旬、全国に先駆けアベックスとの災害支援協定を締結。その後、広島県呉市、茨城県龍ヶ崎市、愛知県大府市をはじめとした地方自治体や病院、企業へと、その輪は広がっております。まさに、今後の防災をも見据えた対策として、関心が高まっています。



▼標準メニュー（左）と、災害時メニュー（右）。災害時には、レギュラーコーヒーの商品ボタンが、「お水」と「お湯」ボタンに早変わり。お薬の服用や、乳児のミルクをつくるのに役立っていただけます。



MEMO

アベックスの「水」へのこだわり

コーヒーや、清涼飲料水を製造するのに、水は欠かせません。缶やPETボトルという容器に予め充填された飲料も同じことです。とりわけ、その場でその都度飲み物をつくるカップ式自動販売機は、自動販売機内がいわば飲料製造工場や喫茶店と同様ですから、アベックスは「その場の水」にこだわります。

そこで、アベックスでは、使用する水の状態に応じて、最適な水フィルターを使い分けています。また、同じ種類のフィルターの中でも、より高レベルのものを使用し、安全・安心はもとより、飲み物の「おいしさ」を大切にしています。

- カーボンフィルターは残留塩素や懸濁物を除去します。
- 殺菌フィルターは残留塩素や微粒子、原虫を除去します。

フル（糸巻）フィルター
塩素発生装置取り付け

高い

易しい

大きい

バイパスフィルター

残留塩素濃度

水の衛生管理

味覚への影響

アベックス

カーボンフィルター
殺菌フィルター

低い

難しい

小さい

また、アベックスでは、販売サービス部門に携わる社員の知識と技能の向上を図るため、国家検定「自動販売機調整技能士」の資格の取得を奨励し、社内の技能評価の基準として採用しています。

等級	特級	1級	2級
人数	32名	346名	424名



環境負荷低減のために

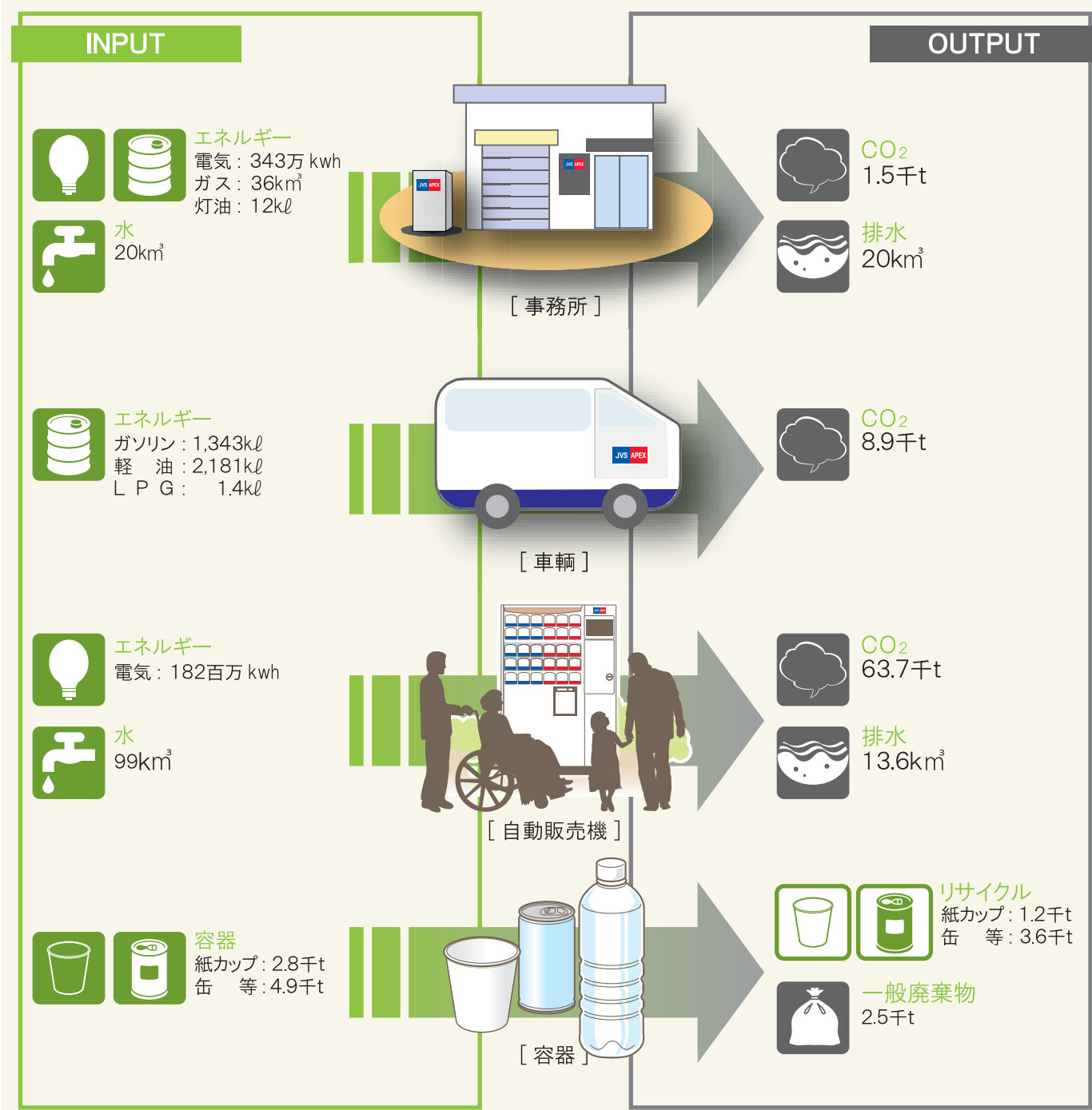
アペックスでは、事業活動にともなって発生する環境負荷の継続的な低減を図るために、事業活動において使用している資源やエネルギーの使用量、空き容器のリサイクル量と廃棄物量等を集計、分析しています。

アペックスでは、お客様のもとから回収した紙カップや缶・ペットボトル等の空き容器のマテリアルリサイクル・サーマルリサイクルを実施している他、レギュラーコーヒー抽出にともない発生する残渣については、2008年

度を開始した肥料化へのリサイクルを継続して行うとともに、2010年度からは新たに炭化リサイクルも行っています。

また、エネルギー起源によるCO₂排出量については、より消費電力量の小さい自動販売機の開発や、お客様への適正台数・適正配置の設置提案、さらなる給油量削減を目指すための車輛の選択、使用方法指導等の実施により、今後も削減に努めてまいります。

事業活動における環境負荷





「4R」の推進を環境方針でコミットメント

アペックスでは、1996年に環境部を設部して以来、一般的な「3R」（「Reduce - 発生物を抑制する、削減する -」・「Reuse - 再利用する -」・「Recycle - 再生する -」）に、「Recover - エネルギーで再利用する -」を加えた「4R」を、環境保全活動の中核として活動しています。

4つめの「R(Recover)」とは、アペックスの取り組

みの特長の1つで、自動販売機から排出される可燃廃棄物をRPFという固形燃料にし、エネルギーとして再利用するという活動（詳細は、13頁～16頁をご参照ください）です。

アペックスでは、「4R」を活動の柱としながら、今後も、持続可能な循環型社会、低炭素社会構築に努めてまいります。

アペックスが推進する4つの「R」とは

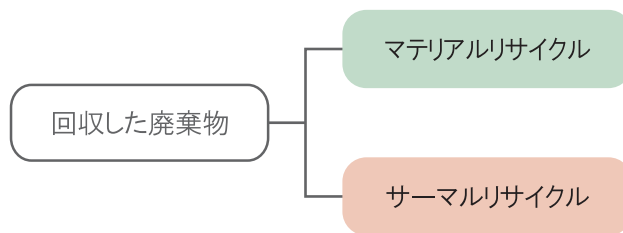




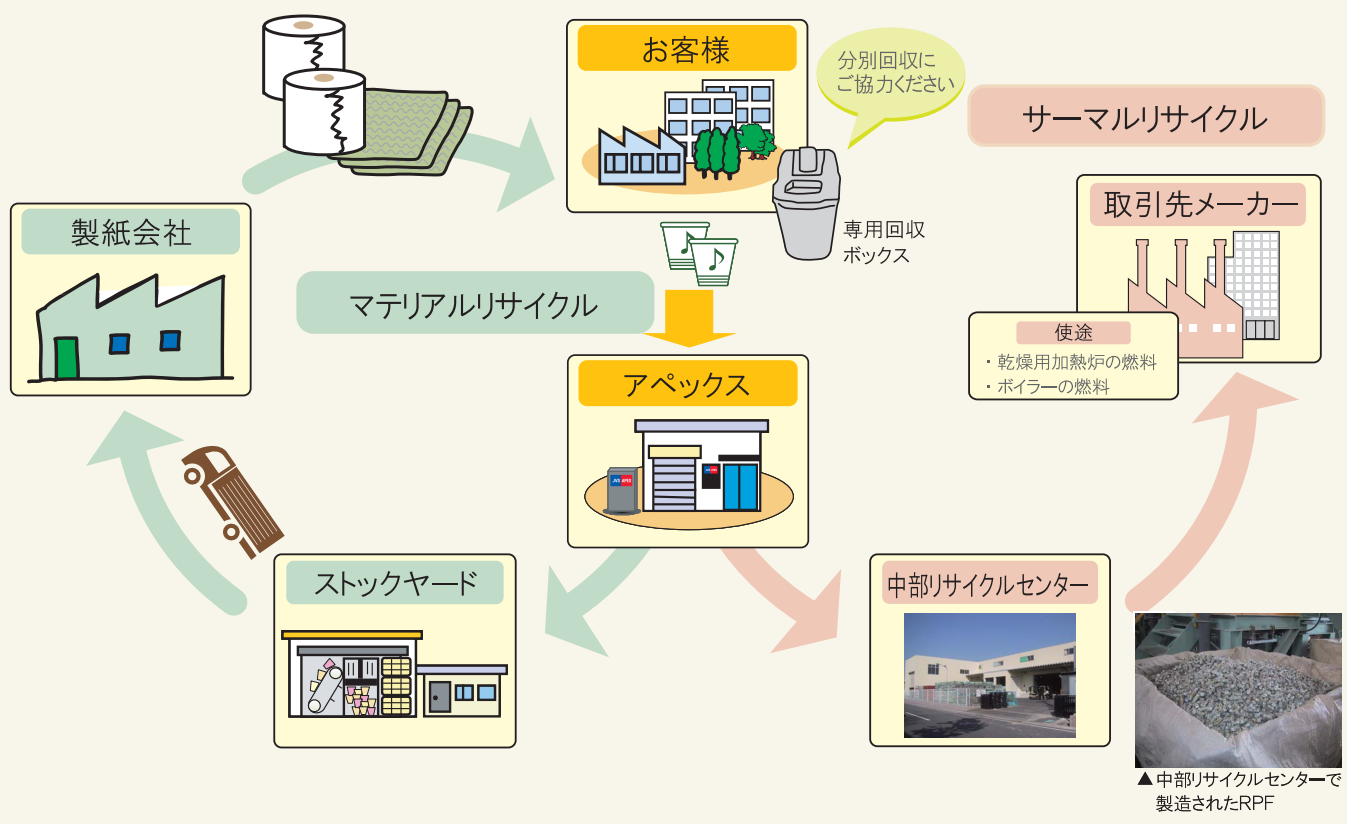
資源の循環利用

アペックスでは、回収した紙カップのマテリアルリサイクルを1998年から開始。また、2001年からはリサイクルの対象物を「可燃廃棄物」に拡大し、そのサーマルリサイクルにも取り組んでいます。

容器包装類、プラスチック類の廃棄物を回収からリサイクルまで責任を持って一括管理することにより、廃棄物のリサイクルを通して廃棄物の削減に努め、循環型社会の構築に貢献しています。



■ アペックスのリサイクルシステム



MEMO

マテリアルリサイクル

廃棄物を原料として再利用すること。同義語に「材料再生」「再資源化」等があります。具体的には、使用済み製品や生産工程から出るごみなどを回収し、利用しやすいように処理して、新しい製品の材料もしくは原料として使うことを指します。アペックスでは、使用済み紙カップを回収して衛生紙等（トイレトーパーやクレープ紙）にリサイクルしています。



サーマルリサイクル

廃棄物を単に焼却処理するだけでなく、焼却の際に発生するエネルギーを回収・利用すること。サーマルリサイクルには、油化、ガス化の他に、ごみ焼却熱利用、ごみ焼却発電、セメントキルン原燃料化、廃棄物固形燃料（RPFやRDF）などがあります。アペックスでは、自動販売機を通して排出される可燃廃棄物をRPFにしています。

■ RPF(あーるぴーえふ)

廃棄物固形燃料の1つ。アペックスでは、使用済み紙カップや紙パックなど、主に紙とプラスチックを破砕・圧縮して作っています。
※Refuse Paper&Plastic Fuelの略。



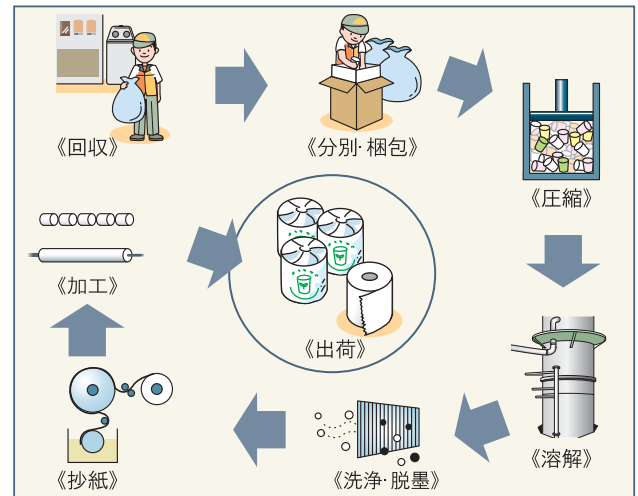
アペックスのマテリアルリサイクル ～紙から紙へ～

アペックスでは、廃棄物の削減、森林資源の保護、生物多様性の保全や、水資源・土壌の保護を地球環境問題の重要な課題であると考え、その取り組みの1つとして、紙資源の有効活用をしています。

アペックスでは、1997年、当時、リサイクルできないものの1つと言われていた紙カップのマテリアルリサイクルシステムを確立。翌年の1998年より、回収した紙カップを衛生紙（トイレトーパー等）や緩衝材へリサイクルしています。

2011年度の実績

2011年度は、約230tの使用済み紙カップ等のマテリアルリサイクルを行いました。



アペックスのサーマルリサイクル ～紙・廃プラからエネルギーへ～

2001年3月、自動販売機を通して排出されるすべての可燃廃棄物のリサイクルを目指し、愛知県大府市において「車輛搭載型固形燃料化設備」を保有し、中部地区の事業所から発生する可燃廃棄物の固形燃料（RPF）化を実施しました。

そして、2004年10月に開設した [中部リサイクルセンター] では、産業廃棄物処分業許可を取得し、自社が運営する自動販売機を通して排出されるものもとより、社外から発生する廃プラ類をも受入れ、固形燃料化し、廃棄物の削減に努めています。製造したRPFは、検査機関に持ち込み、重金属や塩素等の項目について成分分析を行っています。

アペックスのRPFは、家庭系一般廃棄物から製造される生ゴミ・水分を主体としたRDFとは異なり、原料が安定しており、塩素や水分がほとんど含まれていないので、安心してご使用いただける固形燃料です。

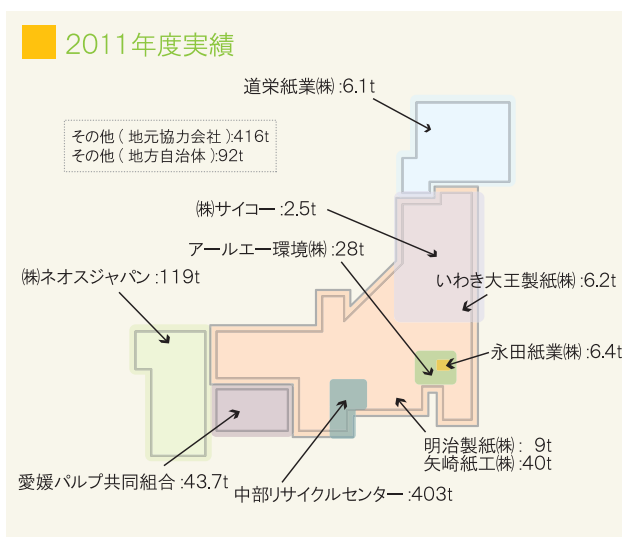
2011年度の実績

2011年度は、約850tの使用済み紙カップ等のサーマルリサイクル（RPF化）を行いました。

	アペックスのRPF	RDF
発熱量(cal/g)	6,000程度	4,000程度
塩素分(%)	0.2未満	2.0未満

※中部リサイクルセンターのRPF化ラインで製造されたRPFの成分と一般的なRDFを比較

リサイクルの実績



MEMO

RPF 製造デモ車

飲料を飲み終えたばかりの空きカップが、目の前で固形燃料に生まれ変わります。その様子を、お客様に実際にご覧いただき、“ごみ”にならないことを実感いただくために、アペックスではRPF製造デモ車をつくりました。さまざまな環境展や学園祭等で、環境教育の啓発にお役立ていただいております。





資源循環への取り組み

アペックスでは、循環型社会構築のために、回収した可燃廃棄物をリサイクルするだけでなく、自主的に拡大生産者責任を課し、リサイクル製品の販売を実施し、資源の循環に努めています。

●衛生紙（トイレットペーパー等）

学校や企業などの自動販売機設置先であるお客様にご利用いただいています。

●RPF

石炭の代替燃料として使用されています。
※RPF1tは、石炭0.83tに相当します。

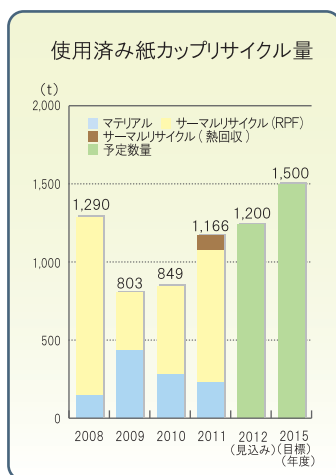
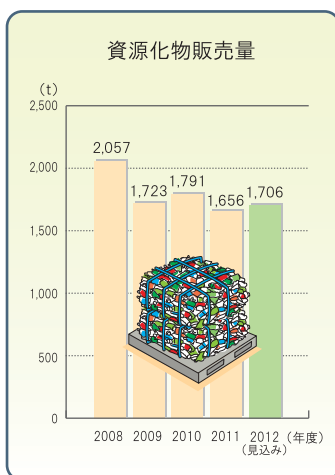
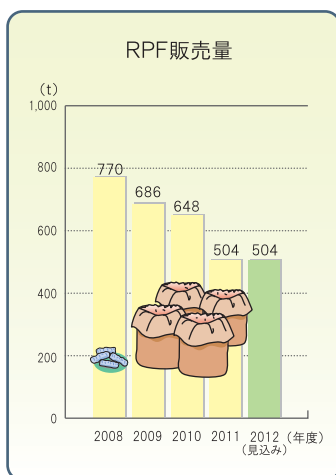
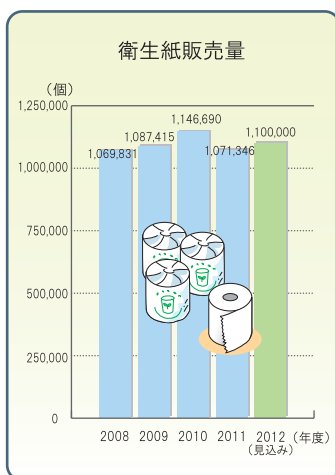
●資源化物

種類毎にメーカーに販売し、再商品化されています。

今後のリサイクル展開計画と課題

リサイクルを実施するうえで、運送効率をあげることは非常に重要な課題です。アペックスでは、まだ改善の余地があると考えており、今後も、新たな回収便ルートの確立や地元協力会社との提携等の検討を重ねることにより、輸送距離短縮や効率化による環境負荷低減を図り、リサイクルの効率化を目指します。

今後も、それぞれのリサイクルの特長を活かしつつ、より環境負荷の低いサーマルリサイクルを中心とした、紙カップリサイクルを推進していく予定です。



MEMO

レギュラーコーヒー残渣のリサイクル

カップ式自動販売機のレギュラーコーヒーは、お客様からオーダーをいただくと（商品ボタン選択後）、その都度、コーヒー豆を挽き、ペーパーフィルターで濾しています。その後、コーヒー残渣は、自動販売機内で脱水し、減量化した状態で、機械内部に据え付けてある専用回収箱に捨てられます。

アペックスでは、このようなレギュラーコーヒー抽出後の残渣を、2008年度から、中部エリアで、肥料へとリサイクルする取り組みを始めました。専用回収箱から回収されたコーヒー残渣は、ペーパーフィルターを除去し、食品以外の異物がない状態にして、肥料製造元に出荷しています。アペックスのコーヒー残渣から生まれ変わった肥料は、製造元との契約農家やJAに販売され、ご利用いただいています。2012年度からは、同様の取り組みを関東エリアにおいても開始いたします。

一方、西日本エリアにおいても、レギュラーコーヒー

抽出後の残渣を、2010年度から炭へとリサイクルする取り組みを始めました。

これらの取り組みは今後も継続して行い、肥料化率や炭化率を高めていく予定です。それにとともに、残渣回収エリアの拡大、回収の効率化に努めるとともに、食品リサイクルを通して、食品残渣の再生利用化を図り、食品廃棄物の削減に今後も貢献してまいります。

2011年度の実績

2011年度は、レギュラーコーヒー残渣の約72tを肥料化リサイクル、約53tを炭化リサイクルしました。



▲製造された肥料



▲製造された炭



TOPIC

中部リサイクルセンター

アペックスでは、2004年10月、RPF(固形燃料)製造の拡大効率化と、缶・ペットボトルの自社内リサイクルの体制を整えることを目的に、愛知県東海市に[中部リサイクルセンター]を開設しました。

同センターではRPF化ラインと資源化ラインの2つのラインをもち、廃棄物の削減と循環型社会構築に貢献するため、飲料自動販売機を通して排出される、使用済みのすべての容器包装類(紙カップ、原料袋、缶、ビン、ペットボトルなど)のリサイクルを自社で責任を持って行っています。



▲中部リサイクルセンター(愛知県東海市)

固形燃料(RPF)化ライン

固形燃料化ラインでは、自社の自動販売機から排出される紙カップ、原料袋などの容器包装類、廃プラスチック類(社外から受け入れたものを含む)を、破碎・圧縮し、直径15mm・長さ50mm程度のクレヨン状に加工します。製造した固形燃料は、検査機関に持ち込み、高位発熱量、灰分、水分、硫黄、塩素の5項目について成分分析を行っています。

石炭の代替として、乾燥用加熱炉の燃料やボイラーの燃料として使用されます。



[固形燃料化ライン]

■ 取り扱い品目

紙カップ・原料袋・紙パック・紙(複合紙)・廃プラスチック類等(※塩化ビニール不可)

■ 処理能力

3.6t/日

資源化ライン

資源化ラインでは、主に自動販売機を通して排出された、空きスチール缶・アルミ缶・ペットボトル・ビンを選別し、スチール缶は35kg、アルミ缶は7kgのブロックにプレスします。また、ペットボトルとビンは手作業で分別を行います。選別・圧縮された空容器は、各メーカーに出荷後、再商品化されます。



[資源化ライン]

■ 取り扱い品目

スチール缶・アルミ缶・ペットボトル・ビン

■ 処理能力:12.0t/日

※円内はペットボトルのベアラー機

■ 処理能力:4.0t/日

MEMO

RPFについて

- 化石燃料の代替となりますので、資源枯渇防止に役立ちます。
- 化石燃料と同等の熱量があります。
- 灰分化率は一般的に3~7%^{*}。石炭は11~15%程度なので、使用後の灰の埋立て処分量が削減できます。
- コンパクトな形状でハンドリング性に優れています。

- 歩留りが良いうえ、素材段階からリサイクル段階に要するエネルギーの小さい燃料です。
- 紙カップと廃プラの分別の必要がないため、作業効率にも優れます。
- 石炭(例 輸入一般炭)に対して、燃焼時に同一熱量回収を行う過程で石炭よりも約33%のCO₂排出量削減^{*}になり、地球温暖化防止に貢献します。

※日本RPF工業会調べ



TOPIC

日本ベンダー整備株式会社の取り組み

自動販売機の長寿命化

アベックスは、1966年、オペレーターとして初めて自動販売機のオーバーホールを開始。その後、整備部門は、1976年、日本ベンダー整備株式会社として独立しました。

アベックスでは、機械メーカーから購入し、お客様先に設置した自動販売機を、当社規程に基づき、日本ベンダー整備株式会社で計画的に整備を行っています。この計画的なオーバーホールの実施により、通常7年で廃棄処分になってしまう自動販売機の寿命を13～14年まで延ばし、長寿命化を図り、省資源化、廃棄物の削減に努めています。



▲全国からオーバーホールのために集まった自動販売機

オーバーホールと環境負荷低減

日本ベンダー整備株式会社では、稼働時の故障や整備時の改良点等について、アベックスと情報の共有化を図りながらオーバーホールを実施しています。それらの情報は、次の新機種開発にも活用され、自動販売機の進化に大いに役立てられています。

また、単なるオーバーホールではなく、デザイン変更や新機能搭載等、積極的な改造や修理等も行っています。そして、既存の自動販売機の内部で使用している保温材や断熱材からホース1本に至るまで、1点1点の部材の材質を見直すこと等により、どれぐらいの環境負荷低減を図ることができるのか検証を続けながら、さらなる環境負荷低減を実現させるべく取り組みを行っています。

2001年6月には、JVRリサイクルセンターを開設しました。廃棄する自動販売機から、社内基準に基づい

た再生可能部品の回収を行っています。回収した部品は、日本ベンダー整備株式会社で再生し、自動販売機の整備や修理に使用しています。

2011年度の実績

2011年度は、4,751台の自動販売機の整備を行いました。



▲(オーバーホール) 塗装工程



▲(オーバーホール) 分解工程

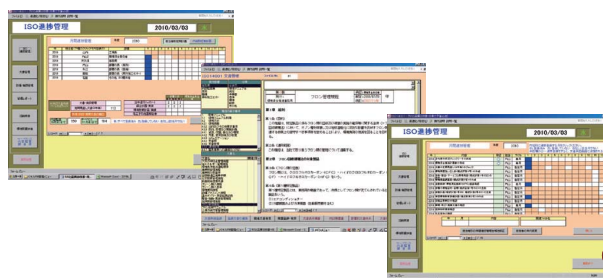
円滑で継続的なISO14001活動のために

日本ベンダー整備株式会社は、原料加工センターとともに、2000年12月、ISO14001を認証取得しました。自動販売機の整備工場と原料の加工センターという、オペレート業務とは異なる業務内容であることから、適用を受ける法令等もアベックスとは異なり、それぞれの厳しい基準を順守するために独自の活動を行っています。

活動の記録をパソコンで一元管理し、文書管理や活動の進捗管理をはじめ、順守評価や不適合是正報告の管理や有資格者の管理・教育に至るまで、誰もがいつでも確認できるシステムで運用管理しています。また、行政等への届出や許可証の有効期限が近づく警告が表示されたり、万一滞っている活動や報告が

ある場合にも警告で知らせ、注意を喚起します。

日本ベンダー整備株式会社では、この一元管理が、活動のクオリティの均一化を図りながら、継続的な改善につなげていく手段であると考え、今後も活動と管理の充実に努めてまいります。





TOPIC

オフィス飲料への取り組み

アペックスでは、オフィス向けに1993年より開始した、フラビア®パックを使用する商品に加え、新たに2010年度より「POD Drink System(ポッドドリンクシステム)」を始めました。

現在、東京と大阪に2ヶ所の専任拠点を設け、アペックスならではの肌理細やかなサービスをお客様から高く評価していただき、合計約7,200台のオフィス向けポッドマシンが稼働しています。

POD Drink System(ポッドドリンクシステム)

■特長

●一杯ずつ

ドリンクは、その都度、一つずつ窒素充填した個包装のカフェポッドからカップに抽出するので、いつでも淹れたて。本格珈琲の深い香りと味がお楽しみいただけます。もちろん、「ポッドドリンクシステムIMU」では、アイスコーヒーも簡単に作れます。

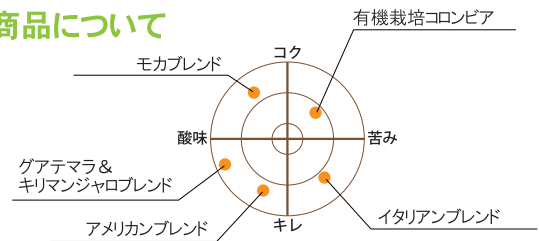
●カンタンお手入れ

コーヒーカスが出ませんので、器具を洗う手間がかかりません。いつでも清潔、衛生的です。

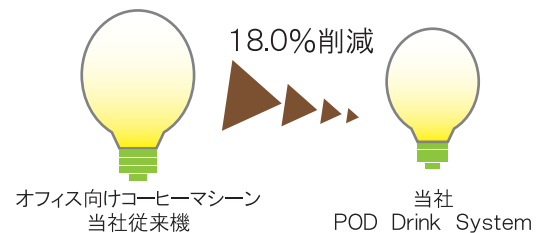
●環境負荷に配慮したコンパクト設計

レギュラーコーヒー専用機ですので、機械の仕組みや使用方法がシンプルで、しかも、消費電力や設置スペースもコンパクト。機械の製造過程、輸送等の各工程においても、環境負荷低減に努めました。

■商品について



■さらなる省エネを実現した消費電力量



フラビア®パックシステム

■特長

●一杯ずつ、挽きたて

挽き立ての珈琲やリーフティーを1杯分毎に密封パック。この密封パックにより、酸化を防ぎ、抽出の瞬間まで珈琲本来のフレッシュさを保ちます。

●一杯ずつ、淹れたて

1杯毎のドリップ方式を採用。1杯毎に抽出するので、衛生的なうえ、ムダが発生しません。また、抽出と同時に乾燥処理を行うため、デスクサイドでのご利用に支障をきたしません。

■使用済みフラビア®パックのリサイクルを開始

フラビア®パックは、その構造上(ノズル部分がポリプロピレン・本体部分がポリプロピレンとアルミ・フィルターがポリプロピレンで構成されており、パックの中にはレギュラーコーヒーが入っている)、中部リサイクルセンターでのリサイクルには、設備上、多くの課題があったため、難航しておりました。しかし、2009年、ようやく提携先を見つけることができましたので、RPFへのリサイクルに努めています。

■保護パッケールのリサイクル

フラビア®パックを輸入する際、抽出ノズルを保護するために取り付けられている保護パッケールは、ポリスチレンで製造されています。

アペックスでは、この保護パッケールを、2002年10月よりRPFにリサイクルしており、今後とも、継続して行ってまいります。

また、ポリスチレンの単一素材であることを活かしたマテリアルリサイクルも実施しています。



▲レールと紙カップで作ったRPF



▲プラスチック成型工場(中国)

■「レインフォレスト・アライアンス」認証の商品を販売

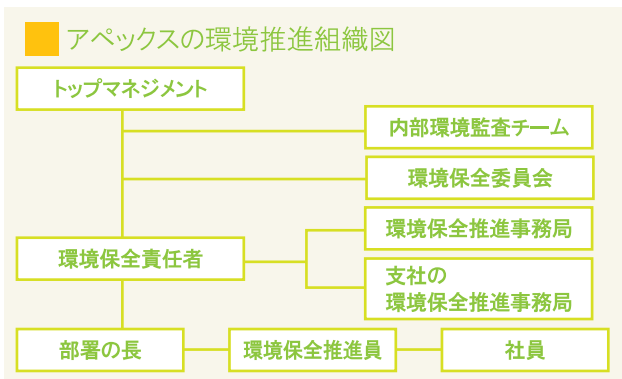
コーヒーのアルテラ™や紅茶のブライティアー™カンパニーのラインナップにレインフォレスト・アライアンス認証商品を取り扱っています。(関連記載内容:8頁)



アペックスの環境マネジメントシステム

ISO14001をグループで認証取得

アペックスでは、全事業所およびグループで、環境マネジメントシステムの国際規格 ISO14001を認証取得し、「PDCAサイクル」を徹底し、継続的な環境負荷低減活動に努めています。2011年秋には、4回目の更新を無事に終わりました。



社内環境監査システム

アペックスでは、社内規程に基づき、毎年全サイトで社内環境監査を実施し、環境保全活動の妥当性を監視しています。

2011年度の監査実績

2011年度は、社内環境監査を130拠点において、部署の長の役割について、重点的に実施。その結果、[観察]として179件、[軽微な不適合]として60件、改善指摘事項が発見され、[重大な不適合]は発見されませんでした。指摘事項は、社内規程に基づき、速やかに是正処置に取り組み、各監査員が是正内容の確認を行いました。



社内環境監査
(いずれも四国支社)



環境関連コンプライアンスへの対応

アペックスでは、適用を受ける法令等の動向を確実に把握し、順守すべき法令等を登録表にまとめています。それに基づき、産業廃棄物処理委託業者の現地確認を行うほか、年4回全部署でチェックシートを用いた法令等の順守状況の点検を実施したり、行政のHPを活用した情報収集等を適宜行っています。

2011年度の順守状況

2011年度、環境関連法規等、適用を受ける法令等に関する違反事項はありませんでした。

環境関連の苦情・要望・問い合わせとその対策

2011年度、環境関連の要望・問い合わせは、環境保全活動に関する調査・協力依頼および問い合わせ等が、29件ありました。これらすべての依頼および問い合わせ等について、速やかに対応しました。



▲産廃処理委託業者の現地確認
(京葉支社)



▲産廃処理委託業者の現地確認
(中国支社)

社員への環境教育

アペックスでは、環境教育の重要性・必要性を重んじ、ISO14001規格に則り、全事業所において、環境方針や環境目的・目標に関する教育や「理解度テスト」を実施しています。

対象	教育名
全社員	環境一般教育
新入社員	新入社員教育(環境教育有り)
車輛運転者	エコドライブ運転テクニック教育
力量業務従事者	環境特別教育
支社長・部署の長	管理者教育(環境教育有り)
課長	内部環境監査員教育



▲中部リサイクルセンターにおける新入社員教育



▲北関東支社における社員教育



環境計画の概要と評価

アベックスでは、持続可能な低炭素社会の実現を目指し、環境方針に基づき、継続的な環境保全活動を行っています。2011年度も、以下のような、具体的な環境目的・目標を設定し、達成するために取り組んできました。

環境影響評価の結果、環境負荷が大きいために環境評価点の高い〔車両給油量削減〕や〔紙カップリサ

イクル率向上〕については、全社をあげて取り組むべき項目として継続的に活動しています。

また、アベックスでは、業務改善は、環境負荷低減のみならず、有益な環境側面も生み出すことから、取り組む意義が大きいと考えており、今後も、内容ある活動に取り組んでまいります。

環境目的	2011年度環境目標	実績	評価
地球温暖化&資源枯渇防止 業務改善活動	【車両給油量の削減】(全部署) 自動販売機1台当たり給油量(原単位): 09年度比3.0%削減	達成率: 213.3%	😊
廃棄物削減	【紙カップリサイクルの促進】(カップ飲料事業本部) 年間紙カップリサイクル率: 28.0%	達成率: 153.2%	😊
社会貢献	【一部署一役運動】(全部署で事務所周辺の清掃活動等を実施) 頻度: 2.0回/月(80%の部署で達成)	達成率: 108.5%	😊
拠点の 業務改善活動	【業務改善による環境負荷低減】(全部署) 達成部署件数割合: 80%以上	達成率: 101.3%	😊
業務改善活動	【自動販売機のトラブル件数削減】(サービス品質部) トラブル発生件数: 05年比12%削減	達成率: 100.8%	😊
環境対応型 自動販売機開発	【環境対応型自動販売機の開発】(開発部) 総合評価点数: 85点	達成率: 100.0%	😊
業務改善活動	【原料差異率の削減】(環境部) 差異率1.3%以上の拠点数: 8拠点以内	達成率: 41.0%	😞
地球温暖化防止・ 資源枯渇防止	【省エネルギーの推進】(中部リサイクルセンター) 処理量当たりCO ₂ 排出量: 08年度比15%削減	達成率: 139.3%	😊
業務改善活動	【利益改善】(経営企画室 フード部門) 直接営業予算: 達成	達成率: 129.2%	😊
業務改善活動	【車両事故発生の低減】(総務部) 年間車両事故件数: 07年度比10%削減	達成率: 106.0%	😊
地球温暖化防止・ 資源枯渇防止	【グリーン購入法特定調達物品等の調達の推進】(購買部) グリーン品目数割合: 総購入点数に対する80%	達成率: 106.5%	😊

※評価について 😊: 達成 😞: 未達成

環境コスト

環境保全活動に伴う全コスト			(百万円)
会計区分	費用	効果	
サービス活動により生じるコスト	リサイクル費用	78.2	158.8 ※1
	廃棄物処理費用	234.8	—
	その他環境整備費用	76.1	—
管理活動におけるコスト	ISO維持費管理費・教育費等	7.7	53.1 ※2
社会活動におけるコスト	展示用パネル・パンフレット等	1.0	—
合 計		397.8	211.9

※1 再生品販売費(衛生紙、RPF、資源化物、その他)

※2 2000年(全社ISO14001認証取得活動開始)と比較した光熱費・帳票代等の削減費用



一部署一役運動

アペックスでは、「地域社会の信頼を集めよう」を合言葉の一つに地域社会との交流・社会貢献活動に力を注いでいます。

2011年度は、震災直後から約半年に亘り、避難所における「復興支援自販機」による支援をしてまいりました。また、アペックスが経営する東京・有楽町の仏レストラン「アピシウス」において、5月・10月には「チャリティーカレーフェア」を行った他、2012年2月には宮城県石巻において、炊き出しを行いました。

**夏まで「復興支援自販機」で被災地を支援。
仏レストランでのチャリティーカレー。
石巻では炊き出しを行いました。**

一方、震災の影響で例年に比べると各地で開催される環境展等の機会は少なかったものの、事務所周辺の定期清掃、市町村の社会福祉協議会へのリサイクルトイレットペーパーの寄託、企業・NPO法人・自治会等が主催する「環境フェア」や環境教育への参加・支援等を行いました。

今後も、いま自分たちにできることは何なのかを見つめつつ、できる限り積極的な地域社会との交流、社会貢献を図ってまいります。

**駅前清掃や、献血は社会貢献の基本。
お取引先での環境展にも
参加させていただきました。**



▲被災地での復興支援自販機



▲渋谷駅前を清掃。定期的に献血にも参加しています。
(首都圏支社・東京本社)



▲レストラン「アピシウス」でのチャリティーカレー
▼石巻での炊き出しの様子



▲お取引先様における環境展にRPFデモ車を出动させ、
お手伝いしました。(中国東支社)



リサイクル工場見学会の開催

アペックスでは、弊社のリサイクルシステムをご確認いただくため、お客様のご要望に合わせて、富士市のストックヤード及び製紙工場、中部リサイクルセンター、日本ベンダー整備株式会社等のご案内をしております。



▲中部リサイクルセンター



▲古紙ストックヤード

環境保全活動の歩み

国内外の主な動き

- ・「環境基本法」制定
- ・「JISQ14001」発効
- ・京都会議 (COP3) 開催 (「京都議定書」採択)
- ・「家電リサイクル法」制定

- ・「PRTR法」制定
- ・「循環型社会形成推進基本法」等循環関係法6本成立
- ・環境省発足
- ・「フロン回収破壊法」制定

- ・「第2回地球サミット」開催 (ヨハネスブルグ)
- ・「自動車リサイクル法」制定
- ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
- ・「JISQ14001:2004」発効
- ・「京都議定書」発効

- ・「電気用品安全法」経過措置期間終了

- ・「改正容器包装リサイクル法」「改正フロン回収破壊法」「改正食品リサイクル法」「改正電気用品安全法」施行
- ・「第1回アジア・太平洋水サミット」開催
- ・「京都議定書」第一約束期間開始
- ・洞爺湖サミット開催
- ・「生物多様性基本法」施行

- ・「改正家電リサイクル法」施行
- ・コペンハーゲン会議 (COP15) 開催

- ・「改正省エネ法」施行
- ・「改正温対法」施行
- ・国連地球いきもの会議 (COP10) 開催
「名古屋議定書」「愛知ターゲット」採択
- ・カンクン会議 (COP16) 開催
- ・東日本大震災
- ・ダーバン (COP17) 開催

アペックスグループの動き

- 1966年
 - ・自動販売機のオーバーホールを開始
- 1973年
 - ・自動販売機のオーバーホール工場開設
- 1976年
 - ・自動販売機整備部門を「日本ベンダー整備株式会社」として独立
- 1981年
 - ・カップ式自動販売機「APEX 2400」発表
- 1986年
 - ・カップ式自動販売機「APEX 5000」発表
- 1993年
 - ・オフィス向けドリンクシステム「フラビア®S220」発表
- 1996年
 - ・環境部を設立
- 1997年
 - ・デポジット式紙カップ専用回収機「カップエコジット™」発表
- 1998年
 - ・非木材紙カップの使用開始
 - ・使用済み紙カップのマテリアルリサイクル開始
 - ・カップ式自動販売機「APEX 120RV」発表
※業界初・映像情報装置搭載
- 1999年
 - ・ISO14001 認証取得 (東京本社・開発部・横浜南SC・厚木SC)
- 2000年
 - ・グループ会社日本ベンダー整備株式会社にて ISO14001 認証取得
- 2001年
 - ・愛知県で移動式固形燃料化設備を導入
※サーマルリサイクルを開始
 - ・カップ式自動販売機「APEX 120QV」発表
※カップミキシング機構搭載、世界最速クイックベンダー
 - ・「有機栽培生豆100%使用コロンビア」発売開始
 - ・JVRリサイクルセンター設立
 - ・環境報告書発行開始
- 2002年
 - ・全社 (101サイト) にてISO14001 認証取得
- 2003年
 - ・新リサイクルプラント建設企画
- 2004年
 - ・中部リサイクルセンター設立 操業開始
- 2005年
 - ・カップ式自動販売機「APEX 130REC(T)」発表
※大型タッチパネル搭載
 - ・中部リサイクルセンター 全ライン操業
 - ・「ウェステック大賞2005」において事業活動部門賞受賞
 - ・グループ会社株式会社名古屋フーツにてISO14001 認証取得
 - ・中部リサイクルセンター 拡張工事
 - ・「資源循環技術・システム表彰」において会長賞受賞
 - ・バイオガソリンのテスト使用を開始
 - ・「全国高等学校校定時制通信制教育六十周年記念式典」において文部科学大臣賞を受賞
- 2006年
 - ・「VENDEX JAPAN 2008」に出展
 - ・レギュラーコーヒー残渣のリサイクル (肥料化) 開始
 - ・カップ式自動販売機「APEX 120QREC」発表
 - ・カップ式自動販売機「APEX 50RB」発表
 - ・使用済みフラビア®パックの固形燃料化を開始
 - ・ISO14001 認証取得から10年が経ち、「10年継続賞」受賞
 - ・株式会社アペックス西日本設立
- 2007年
 - ・「全国高等学校校定時制通信制教育六十周年記念式典」において文部科学大臣賞を受賞
- 2008年
 - ・「VENDEX JAPAN 2008」に出展
 - ・レギュラーコーヒー残渣のリサイクル (肥料化) 開始
 - ・カップ式自動販売機「APEX 120QREC」発表
 - ・カップ式自動販売機「APEX 50RB」発表
 - ・使用済みフラビア®パックの固形燃料化を開始
 - ・ISO14001 認証取得から10年が経ち、「10年継続賞」受賞
 - ・株式会社アペックス西日本設立
- 2009年
 - ・ISO14001 認証取得から10年が経ち、「10年継続賞」受賞
 - ・株式会社アペックス西日本設立
- 2010年
 - ・カップ式自動販売機「APEX 100QRC」発表
 - ・コカ・コーラウエスト株式会社と資本・業務提携契約締結
 - ・レギュラーコーヒー残渣のリサイクル (炭化) 開始
- 2011年
 - ・被災地の避難所にて「復興支援自販機」で被災地を支援
 - ・仏レストラン「アピシウス」にてチャリティーカレーを開催
 - ・宮城県多賀城市と災害支援協定を締結



Environmental Report 2012



◀大府本社 社屋に設置された太陽光パネル

お問い合わせ



アベックスグループは、環境マネジメントシステムの国際規格ISO14001:2004を認証取得し、環境保全活動に積極的に取り組んでいます。

<http://www.apex-co.co.jp>



R100

この小冊子は再生紙を使用しています。



植物油インキを使用しています。